慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鈴村直樹君追悼
Sub Title	Gedenkrede für Naoki Suzumura
Author	境, 一三(Sakai, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.59 (2019.) ,p.137- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鈴村直樹教授追悼記念号 = Sonderheft zum Andenken an Prof. Naoki Suzumura エッセイ=Essays
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20191031-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鈴村直樹君追悼

境　　一　三

鈴村直樹慶應義塾常任理事，経済学部教授が 2018 年 5 月 16 日に亡くなりました。

鈴村君からもらうメールの書き出しはいつも「境さ～ん」でした。「さ」と「ん」の間に必ず「～」が入るのです。ぼくも，「鈴村君」とかしこまっては呼ばず，いつも「鈴ちゃん」と言っていました。

鈴ちゃんは，いつも快活で楽しく，だれもが好きにならざるを得ない人でした。学生からも，職員からも，もちろん教員からも好かれていました。人付き合いが並外れて良く，教員の中で職員と一番飲みに行く回数が多いのも鈴ちゃんでした。他大学にも懇意の先生方が大勢いました。一緒に根を詰めた仕事がはねると，「ちょっと寄っていく？」となるのです。だれもが鈴ちゃんとお喋りするのを楽しみにしていました。それはこの上なく楽しい時間でした。決して人の悪口は言わず，グチも言わず，いつも愉快な話ばかりでした。聞き上手で，いつも“Ja, genau!”と相槌を打ってくれました。

鈴ちゃんとぼくは，東京外国語大学ドイツ語学科の同窓です。学生時代から親しくつきあっていた，と言いたいところですが，実は鈴ちゃんはぼくの七年も後輩で，大学院も別でしたから，学生時代は接点がなかったのです。最初に会ったのは，確か一九九四年のドイツ語技能検定試験の問題作成委員会だったろうと思います。なんだか，とても明るく楽しい，しかしめちゃくちゃ優秀な人がいるなというのが最初の印象です。

鈴ちゃんは，いつも実年齢よりも年上に見られました。よくぼくよりも年長に見られたものです。普段着ならばともかく，スーツを着るともう押しも押されもせぬ重役の姿形です。一緒にソウルに出張したとき，向こうの先生が連れて行ってくださった料理屋では，中居さんがなんと鈴ちゃんを真っ先に案内するではありませんか！　実はそのなかでは最年少であったにもかかわらず。

鈴ちゃんは，テニスを愛する人でした。時間があるとテニスをしていました。ボールに乗り上げて，骨折したこともありました。テニスのためなのかそうでないのか，鈴ちゃんは年がら年中ジャージを着ていました。授業にももちろんジャージで行きます。肩肘を張らない人でした。ぼくら同僚にとっては，鈴ちゃんのジャージは季節を知らせるものでした。短パンを穿いてくれば，春になったなと思い，長ズボンになれば，それは銀杏の色づきと共に秋の訪れを知らせるものでした。

鈴ちゃんはゲルマン語学者でした。ドイツ語だけでなく，ノルウェー語，デンマーク語，オランダ語などをよくしました。近年は主に受け身の研究をしていたようです。教員としては，慶應，フェリス女学院大学などでドイツ語を教える他，東海大学や外務省研修所ではノルウェー語を担当していました。とにかく，楽しく，優しく，面白く，面倒見の良い先生でしたから，人気が出ないわけがありません。とりわけフェリスの授業は楽しみにしていたようで，「他をやめても，フェリスだけは絶対にやめないからね」と言っていました。

多くの大学教員がそう思うように，教師と研究者の仕事だけであれば楽しいことの方が多いでしょう。しかし，われわれは大学運営の仕事をもしなければなりません。鈴ちゃんは，慶應で，考えられるありとあらゆる役職をこなしてきました。仕事を断れない人でした。ぼくが外国語教育研究センターの所長を辞めるとき，後任として真っ先に思い浮かんだのも鈴ちゃんでした。お願いすると，ちょっとためらいはあったものの，結局は快諾してくれました。しかし，それも任期が来ないうちに，英語その他の外

国語で学際的な授業展開をするためのGIC（Center for Global Interdisciplinary Courses）というセンターが設けられ，その所長として横滑りしていきました。所長と言っても，鈴ちゃん以外は事務長一人，所員ゼロという体制で，すべての仕事を事務長と二人でこなしていました。さまざまな科目を英語などの外国語で担当してくれる先生を探しに，文字どおり日本中を東奔西走していました。

鈴ちゃんは，慶應義塾の現役の常任理事として五十四歳の生涯を閉じました。仕事を断らない，断れない人でしたから，常人の何倍ものしごとを抱え込みました。余りに年若く逝ってしまいましたが，少なくとも人の十年分多く仕事をしたのではないでしょうか。実年齢に十を足すと六十四，ほぼ慶應の定年の年に達します。それにしても，早すぎた。鈴ちゃんも無念でしょうが，ぼくたちも残念でたまりません。まあ，ちょっと休んで，向こうで先に行った仲間たちとテニスを楽しんでください。しばしさようなら。またいつか向こうで杯を傾けて，語りあおう。Bis dann!

本稿は，『ラテルネ』120 号（同学社，2018 年秋号）に収録されたものを，許可を得て転載したものである。